

現在に生きる頭飾りの伝統

頭飾り(標本番号H204345、幅/24cm 奥行/33cm)

池谷 和信(いけや かずのぶ)

本館民族社会研究部

アフリカ大陸の南部には、サン(ブッシュマン)とよばれる人びとが古くから暮らしてきた。彼らは、野生植物の採集を中心にして、キリンやゲムスボックなどの狩猟をおこないながら移動生活を送ってきた。しかし現在の彼らの多くは井戸の周囲に定住化しており、毛皮製の服ではなく洋服を着て、木製ではなくコンクリートの家に住むようになった。なかには、携帯電話をもつ人も生まれている。

その一方で、彼らの生活のなかで変わらないうものもある。それは、ビーズ作りの伝統である。女性は、ダチヨウの卵の殻の破片をくだいて穴を開けて、それを直径五ミリ程度の円形に整え、ゲムスボックの腱をほどいた糸を使い首飾りを作る。これは、古い考古遺跡から見つかっていることから、人類最古のビーズのかたちであるともいわれる。また、かつてはガラスビーズ、現在ではプラスチック

ビーズを購入して、赤や緑や青などのカラフルな玉からなる首飾りも作る。つまり、ビーズの素材は変わっても、その作り方やそれを作ることにたいは変わっていない。



しかし、写真のような女性の頭飾りになると別である。わたしが長期間滞在したサンの村では、頭飾りを作ることにはない。その理由はよくわからないが、この頭飾りを身につけ

てきたのは、ボツワナ北西部からナミビア北東部にかけて暮らすサンの言語集団のひとつクンの女性のみである。かつて彼らの居住域は二国の国境に分断された結果、親族同志の行き来は法的には難しくなった。しかし、国境上の高さニメートル余りのフェンスは途切れている場所があり、こっそりとなら現在では行き来することができる。

残念なことに、一九八九年に、わたしがクンの村を訪れた際には、その頭飾りをつけている人はすでに見られなかった。写真のものは、ダチヨウの卵の殻をつなげた白色の部分とさまざまな色からなるプラスチックビーズが組み合わさっており、それらは動物の腱ではなく紐でつながられている。これは、クンの女性が民芸品として作ったものであり、一九九六年にわたしがナミビアで仲買人から購入したものである。ここでもビーズはさらに進化を遂げていたのである。